

京都部落問題 研究資料センター通信

第28号

発行日 2012年7月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 2012年度部落史出張講座

地元で学ぶ地元の歴史 in 西三条

当資料センター主催の「部落史出張講座―地元で学ぶ地元の歴史―」を中京いきいき市民活動センターで、六月一五日と二九日に開催しました。この講座は、地域の歴史を地元の方々と共に学習することを目的に企画したものです。

今回は、地元のNPO法人あかしやふれあいネットワークの協賛をいただき、毎回地元の方々、教員の方々と四〇名から五〇名の参加がありました。

講演の要旨は次のとおりです。

* * *



第1回 辻ミチ子さん

第1回

北小路村の物語

―御役目をめぐって―

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

まず、地図を使って北小路村の成り立ちから説明をされた。

江戸時代の初め頃、現在の枳殻邸の辺りの北小路という地で皮細工の仕事を営んでいた人びとが、枳殻邸の完成により「河原町松原上ル」の地に移された。そこは後の六条村の人々も住んでいた地であった。さらに寛文一〇年(二六七〇)には、幕府の治安維持のための重要な仕事である刑吏役の役目をもなつて、刑場のあった西土手に近い西京村の地に移された。

その土地は「御役田地」と呼ばれて刑吏役に与えられる土地で、最初の保有者は千本の六兵衛と市井の者だったが、六条村が台頭する中で、北小路村は役目の上では六条村の配下となっていく。

正徳の頃(一八世紀初)から身分

制度が確立し始め、様々な文書に天部村、六条村、川崎村、蓮台野村と共に役人村として軒数や役目について書かれている。

生活の様子については史料が少なく詳しくはわからないが、早い時期に阿弥陀如来の絵像が地元のお寺に下付されており、生活の要として仏教があったということ、また、周辺の村々の商人が出入し、取引があったことなどが「諸式留帳」などの史料によってわかるということである。

第2回

壬生地区における「同和問題」の形成過程と同和对策事業の特徴

―北小路の1世紀(二〇〇年)を考える―

講師 山本崇記さん

(立命館大学非常勤講師)

近世には役人村として重要な位置にあった壬生地区は、近現代史については資料が少なく研究成果も少ない。明治から昭和(戦後初期)までの資料を通観することで壬生地区の同和事業の背景と変遷を検証したいと問題意識を述べられ、明治・大正・昭和の地図や実態調査の写真などを使ってその変遷をわかりやすく説明された。

明治期の朱雀野村の資料では北

小路の「村税未納」の割合が極めて高く、厳しい経済状況であったことがわかる。しかし、その状況の中でも「夜学の開始」「村営湯屋」「青年会活動」などの独自の取り組みも行っていった。

大正期になると米価の上昇を契機に全国で米騒動が起こる。特に西三条では激しい騒動が起こり軍の出動もあり、市内で二番目に多い31名の逮捕者が出た。この米騒動が国や市に危機感を与えて社会事業が始まり、西三条では一九二三年には託児所、浴場、家事見習所が建てられ、一九三六年にはそれらを統一して隣保館となる。

当時の隣保館事業内容として「相談施設事業」、「教育的施設事業」などと共に「修養自治施設事業」があげられていて、当初から「地域の自治を支援する」という機能をもっていたことがわかる。これは、役割を終えたとして隣保館が廃止された現在、捉えなおす必要があると提起された。

また、昭和に入ってから戦時体制が強化される中で、「融和」事業から「同和」事業へと位置づけられ、「単なる隣保事業ではない」とされたことは戦後の同和事業にも影響を与えていると指摘された。

在野の融和運動家・植村省馬（一）

吉田文茂
（高知県部落史研究会）

戦前の部落解放運動にはさまざまな潮流があり、水平運動と融和運動のどちらにも収斂しきれない運動も存在した。一九二〇年代後半に高知県において部落差別撤廃運動を展開した高知県自治団もそのような団体の一つであった。本稿ではその高知県自治団をたちあげ、運動を推進した指導者である植村省馬の生涯を、伝わっているエピソード（実際にあったことかどうかの検討余地のあるエピソードや、実際の出来事であってもものに脚色された可能性のあるエピソードもあると思われるが、いずれにしても植村省馬の人となりや伝えてくれるエピソードであることには変わりはない）を交えながらとりあげてみたい。

一 自己修養につとめる

不良少年からの脱皮

植村省馬（以下、省馬と略す）は一八八七（明治二〇）年二月七日、高知市から西へ二〇kmほど離れた、

高知県高岡郡日下村（現日高村）の被差別部落に生まれる。父は農業（六、七反の水田と山畑三反ぐらいを耕作していたようである）のかたわら牛馬商、いわゆる博勞

をしていた。生活は極貧ではなかったようだが、満足に教育を受けられるほどの家庭ではなかった。そのためか、省馬は他の同年齢の子どもより二年余り遅れて日下尋常小学校に入学、三年九カ月後に同校を卒業し、父の農業の手伝いをおこなうようになる。また、馬の散髪などの仕事に従事し賃金を得ることもあったが、すでに小学校時代に覚えたときれる賭博に熱中し、「世に言う『飲む、打つ、買う』の三拍子揃った不良」（橋詰延寿『植村省馬翁』高知県友愛会、一九五四）になるのは時間の問題であった。

その不良少年の省馬に一大転機がやってきた。ちょうど遊ぶ金に困った省馬が村の金貸しの家を訪ねた時のことである。省馬が借金

を申し込むと、金貸しは「お前は金を何に使ふのだ」と尋ねてきた。省馬が「米代に致します」と答えると、「嘘をいへ、貴様はいつも賭博をやっているといふことだ。又其為に使ふのだろう。己の家にはそんな者に貸す金は一文もない」と、きつぱりと断られてしまった。省馬は悄然として金貸しの家を出て、道すがらこう考えた。

「自分が特殊部落に生れてゐる上に、世間から排斥せられてゐる賭博をやるものだから、益々軽蔑せられて、金貸しにまで金の使ひ所を問はれた上に、貴様に貸す金はないと断られてしまった。何時までもこの様な事をしてゐたら、一生浮ぶ瀬はない。一生人に踏付けられて侮辱を受けねばならん。人の膏血をしぼる金貸しにまで侮辱せられてたまるものか。見てゐよ。己でも正道にかへれば汝等の軽蔑は受けんぞ！」（『新青年』第三卷第一号、一九二二年一月）

このように決意し、悲しみの涙をぬぐって起ちあがった省馬の血潮は脈々と高鳴り、眼は希望に輝いていた。「省馬青年がはじめて

自己を発見した時である」（前掲『植村省馬翁』）と言われる、その瞬間であった。この日を境に省馬の言動はがらりと変わったという。

一九〇七（明治四〇）年一二月、省馬は二〇歳で善通寺騎兵隊に入隊する。この時、村から省馬の外にも数名の入隊者があったが、当時、入隊にあたっては、村をあげて盛大な歓送会が行われ、入隊兵士を村境まで乗馬して送る風習があった。この出発の時、部落の青年たちは省馬を列の先頭に引き立てた。日下村では何か集まりがあると、部落内外の人たちが対立して、衝突することもしばしばであったという。部落の青年たちは日頃差別されている鬱憤をはらさんどばかりに、隊列の先頭に省馬を引き立てたのである。当然のごとく緊張がみなぎり、一触即発の状態となった。これを察知した省馬は自ら馬を降り、部落の青年たちを慰撫して、自ら最後方に立って出発した。結局、その年は部落と部落外の村民の衝突もなく無事に終了したため、省馬のとった行動は村民から称讃を受け、将来を嘱望される青年と目されるようになっていく。

省馬は軍隊でも真面目に勤め、

友人や上官の信頼も厚かったが、入隊翌年の三月に器械体操で腰部を負傷したため、現役免除となつて日下村に戻ってきた。帰ってきた省馬が真っ先に取り組んだのは被差別部落の生活や風俗の改善であった。入隊後に知り合った多くの

人びとの影響を受け、さらにいくつかの土地を演習でまわるなか、自分の生まれ育った部落がいかに「劣等」であるかを悟り、「一般村民から侮辱せられる」状態から脱却すべきであると強く感じたようである。日下村吏員や学校職員

の援助を得て、部落改善に着手していく。第一に取り組んだのは夏季に女性が裸体でいることの厳禁であり、続いて宴会後の残り物をもらいに行くことの禁止であった。また、言葉遣いの改善や服装の整頓、衛生思想の普及のための講話会の開催、学校職員の協力による夜学会の開催など、部落改善のため「自己の職業を抛つことも顧みなかった」ほどであった（前掲『新青年』）。このような省馬の根気強い努力によって、最初は反対の声が部落内には多かったものの、徐々に改善はすすんでいった。

には高知県知事および地元日下村長から、地方改善にとめた模範青年として表彰されている。

二 武術道具商としての成功

高知市への進出

一九一八（大正七）年一月、高知市本町筋二丁目の家を借り、武術道具店を開店するが、家を借りる際の省馬の態度は不思議なものであった。省馬が家主に会って、武術道具商を営みたいからと借家を申し込むと、家主は即座に承知した。その時、省馬は「私は日下のエタで御座いますが、それでもおかまひは御座いませんか」と尋ねたのである。家主は驚いたが、省馬の心意気に打たれたのか、ずっと居てもらってよいと返答している。さらに省馬は、店には「エタ屋」と看板を出し、商買取引上でも初対面の相手に対しては必ずといってよいほど、「私はエタ屋でございます」と挨拶していた（前掲『植村省馬翁』）。

省馬の改善運動への尽力は高く評価され、一九〇九（明治四二）年

察していた節が見られる。それは他者が「エタ」という語を差別的に使用した場合には相手の非を糾す行動を取っているからである。ある時、地元の土陽新聞の記者に対して次のように語っている。

「一般社会が未だに部落を理解せざる最近の実例を挙げてみよう、私が去月（一九二七年七月のこと：筆者）末自治団の要件で室戸町の旅館に泊つて居つた時、丁度室戸岬入選式挙行の際で煙火師の高村氏などが隣室に陣取つていたが、何か町役場との交渉事件があつた揚句、えらい憤慨して『役員員は全部穢多だ』と放言した、自分は此の言葉

など何れも部落を認めて居らぬ証拠である」(『土陽新聞』一九二七年八月二十九日)

また、一九二六(大正一五)年六月六日に高知市堀詰座で開催された高知県水平社連盟大会には自ら出席して「縄田検事糺弾の件」の提案理由説明をおこなっている。これは、借家をめぐるトラブルを省馬が高知地方裁判所に告訴した際に、縄田検事から呼び出しを受けたので、出頭してみたところ、縄田検事が省馬に対して差別的な取り扱いをおこない、省馬自身の言葉には一切耳をかさなかったという出来事である。この縄田検事の態度を遺憾とした省馬は知り合いの県内務部長を訪問して事の顛末を話して、検事を紹介してもらった。ところが、再度縄田検事に面会すると、今度はすべてを否認してしまったとのことであった。それで、高知県水平社大会で検事糺弾の件を訴えたのである。この件は高知県水平社としてとりあげ委員を選定して糺弾に乗り出すことになるが、差別的な対応を受けた時には、水平社の糺弾を依頼することもあったのであり、差別を肯定的にとらえていたわけでは決

してなかった。

溝瀨信義(高知県の福祉教員制度発足の立役者で、部落出身者の教員養成に尽力を傾注する)も「翁(省馬のこと：筆者)は」私には日下のエタぢや」とよく口癖のように言われた。これには部落民も反対で非常に嫌ったものです。しかし翁は一般に対する認識を新にする意味で敢て「エタ」をいつたものではないか。私は決して翁自身から言いたくはなかったものではないかと思う。本人自ら言いたくなかつたと思う(前掲『植村省馬翁』)と述べており、初対面の相手の部落問題への向き合い方を問う意味で、あえて「エタ」と名乗ったのであろう。省馬自身、部落問題を避けて日々暮していくという道は選択肢になかったのである。

三 植村洋服裁縫学院の設立

↳授産事業のころみ

省馬は武術道具商として成功をおさめると、その資産をもとに授産事業として洋服裁縫学院の設立を企図する。洋服裁縫学院の設立を思い立ったのは、部落の人びとのなかに「適当ナル職業ヲ得ナイガ為ニ放縦怠惰ニ陥リ或ハ下劣ナル職業ニ就事シテ品位ヲ失墜シ世

ノ擯斥ヲ受ケル者」が多い現状を憂い、「何トカシテ彼等ニ適当ナル職業ヲ授ケル道ヲ講ジタイト考へ」たからであった。洋服裁縫学院の設立により、「洋服裁縫学院ヲ彼等ニ授ケ将来産ヲ興シ品位ノ向上ヲ図リ同胞相愛ノ実ヲ収メ」ようとしたのである(「洋服裁縫学院設立趣意書」)。省馬は自己の事業が小規模で社会への影響力も決して大きいものではないことを自覚しつつも、微力であっても自分のおこなう事業が先鞭となつて、有力者が後に続くことを期待していたのである。

省馬の洋服裁縫学院には高知県内の有力者から数多くの賛同が得られた。高知県知事、県内務部長、警察部長をはじめ、警察署長や県議員、小学校長、あるいは各地の部落改善家などの賛同を得て、一九二三(大正一二)年六月二日、開院式を挙行し、三〇余名の入学

者に対する無料授業が開始された。当初、本願寺高知別院の一室を間借りしていたのが、三カ月後には独立した作業所も確保して、省馬の事業は順風満帆にスタートしたかのようだった。しかし、建物や設備・備品の購入費や維持費をはじめ、教員や事務員の給与、生徒

の授業料、さらには生徒の生活費までも学院から支給したため、この授産事業の維持・運営には莫大な費用が必要であった。諸費用はすべて省馬が負担するのだが、学院の維持のための費用の捻出には相当苦労したようである。そこで、一九二四(大正一三)年一月には後援会を組織して、県内の有力者からの資金援助を訴え、さらに一九二五(大正一四)年七月には洋服裁縫学院の発展のために新たな趣意書を作成し、活動写真を購入して「社会教化」をはかるとともに、学院の財源確保につとめようとした。

しかし、さまざまな工夫も効果は限定的であったようで、経営困難をもつて、一九二九(昭和四)年に規模を縮小して高知市中須賀町に移転し、洋服裁縫学院は事実上の閉院となった。

四 高知県自治団の活動

↳自主的差別撤廃運動へ

洋服裁縫学院はその名称の示す如く「洋服裁縫ノ技術ヲ授ケ生活ノ安定ヲ得セシムルコト」(「高知洋服裁縫学院々則」)が事業の中心であったが、一九二五年以降は授産事業以外に「同胞相愛ニ関スル

印刷物ヲ発行シ差別撤廃ノ実行ヲ期スルコト」や「同胞相愛ニ関スル講習会講演会活動写真等ヲ開催シ国民精神ノ涵養家庭教育ノ完備四民平等融和促進ノ実行ヲ期スルコト」などの事業も実施されるようになる。具体的には、洋服裁縫学院のなかに「社会部」を設置して、部落差別撤廃のための講演会や講習会を開催することであり、とりわけ活動写真は大勢の聴衆を集めるのに効果は絶大であった。ちなみに、この時、差別撤廃を訴えたのは院主の省馬と弟の政吾、そして水平運動家でもあった森岡深太である。

この裁縫学院社会部の活動を独立させて誕生したのが高知県自治団である。一九二七年に結成された高知県自治団は「聖旨ノ趣旨ヲ奉戴シ自治ノ円満ナル発達ヲ期シ同胞愛ノ実ヲ挙げ人格ノ向上品性ノ陶冶思想ノ善導内容ノ充実ヲ図ル」ことを目的に省馬の肝煎りで組織された団体である。目的だけ見ると紛れもない融和団体であるが、詳細を見るとその実像は官製の融和団体とは異なりを見せていた。特徴のひとつとしてあげられるのは、半官半民の融和団体である

高知県公道会（一九一九年結成）や高知県水平社（一九二三年結成）と一定距離を保ちつつ、官に依存しない在野の融和団体として活動を展開したことである。機関紙として『融和新報』（のちに『自治新聞』と改題）を発行したが、その第一号（一九二八年一月三日）の「創刊の辞」は自らの運動の立場宣言ともなっている。まず、高知県公道会に対しては、「吾等はこれ（高知県公道会のこと：筆者）に敬意を致すと共に自らも又立ちてその驥尾に附し、彼は官、我は野に在りて、相呼応して、県下に一彩の力を致し、一日も早く融和の完成を期するものである」とその存在意義を認めつつも、在野の融和団体である高知県自治団の活動がともなつてこそ「融和の完成」は実現すると考えた。また、水平社に対してはより厳しい見方をとり、「我等の運動は、かの水平運動では無い。水平運動は既にその第一次的使命を終へた。吾等はいたづらに開放を叫び、糺弾をことゝし自己の反省と向上を忘るゝ、空粗なる過激主義を取らない」とボロ派の運動を念頭に置くのか、批判的態度を示した。そして、自らの運動のすすむべき道として、

「開放と共に自己の修養に務め他の悪を糺弾する前に、自己の悪を糺弾し、自己を『何人も尊敬せざるを得ない者』と研磨し、自治の実績を上げ、以つて差別者の覚醒を促し、融和の実現を極力期する」ことを主張した。

特徴のふたつめは、高知県自治団の活動を担った人びとのなかに、高知県水平社の活動家が多く含まれていたことである。水平社の活動家が高知県自治団に結集していたのは、当時、高知県における水平運動が下火になつていたことが一つの要因として考えられる。しかし、高知県水平社は完全に姿を消してしまつたわけではなかつたし、さらに、融和団体として幅広く活動していた高知県公道会が存在するなかで、多くの水平運動家がその活動の場を高知県自治団に求めたことは注目されてよいであろう。

五 施灸は「融和」への捷徑

灸術師としての全国行脚

洋服裁縫学院の活動が休止していくのに反比例して活動が盛んになつていったのは施灸活動である。省馬が日下村の東に位置する伊野町で開業していた塚本利男医師か

ら灸術を習得したのは一九一〇年代なかばのことであつた。省馬は青年時代相撲の名手で、その相撲ぶりを見て感心した塚本医師が省馬に灸治療の秘伝を教えたということである。省馬は灸術をおこなう際には、植村仁川と号したが、この仁川という号は、高知朝倉四連隊長の中川節が仁淀川にちなんで命名したことに由来する（高知県教育センター同和教育研究部編『植村省馬資料集』日高村、一九八六）。

省馬の施灸活動は高知県内を皮切りに、次第に四国から全国へとその範囲を広げ、全国各地を行脚するようになる。対象は圧倒的に小学校児童が多く、ついで教職員や役場職員、生活困窮者、病者などに、大半は無料で施灸をおこなつていった。また、政治家や軍人、警察署長など、各界の「名士」にも施灸し、その名灸ぶりは遠くまで鳴り響いていたようである。

一九二六（大正一五）年一月二五日には高知洋服裁縫学院主植村省馬と顧問矢野清一郎の連署による「趣意書」作成し、省馬のおこなう灸活動への賛助を求めた。その「趣意書」に「児童ニ対シ父兄ノ求ニヨリ無料ヲ以テ施術シ聊カ社会奉仕ノ一端トモ為サントス

尚一般ノ人々ヨリハ些少ノ料金を
申受ケ本学院発展ノ資金ニ当テ
トス但貧困者ヨリハ料金を受ケズ
とあり、小学校児童を対象とする
無料施灸という社会奉仕活動の性
格とあわせて、授産事業である洋
服裁縫学院の資金源として施灸活

動は期待されていたのである。賛
助者は実に一三八名におよび、そ
のなかには佐藤復三高知県知事を
筆頭に、一条実孝や田中光顕など
の高知県ゆかりの華族、田中義一
(首相)、三土忠道(文相)、鳩山
一郎(内閣書記官長)、床次竹二郎
(政友本党総裁)、高知県選出の衆
議院議員である大石大や下元鹿之
助、さらに中川節や中島資朋、宮
地久衛らの軍人、高知県内外の視
学官や小学校長、警察署長などが
含まれている。まさに多彩な顔ぶ
れであるが、とりもなおさず省馬
の交友関係の広さをよく示してお
り、この交友関係の広さが省馬の
灸治活動の全国的展開を可能にし
たといえる。

一九二七(昭和二)年六月には、
仁川後援会名で「名灸師仁川後援
会趣意書」を出している。最初に、
洋服裁縫学院設立の趣旨が述べら
れ、続いて裁縫学院の経営が困難
になっていること、またそのため

の資金づくりのために灸治活動を
拡大していこうと考えていること
が記されている。そして、「社会
事業ノ大発展ヲ企図」して、新た
に設立する「仁川後援会」への賛
同を呼びかけている。

一九二七(昭和二)年三月から翌
年の六月までの施灸実績の報告が
残されているが、それによると一
年四ヵ月間における無料患者数一
五、六六〇名、有料患者数五、三
〇三名となっている。この時は、
もっぱら高知、愛媛、香川の三県
での灸治活動であったが、収入一
〇、六一〇円のうち宣伝費などの
諸費用にかかる五、〇〇〇円を除
いた五、六一〇円が純益となり、
その費用は洋服裁縫学院と融和運
動費にあてられている。まさに施
灸活動は省馬のすすめる融和運動
にとって重要な位置を占めていた
のである。そして、一九二七年八
月二四日には正式に灸術営業免許
を取得し、全国各地を施灸行脚し
ていくことになる。

(以下、次号)

本の紹介

野町均著 『永井荷風と部落問題』

田中勝子

(大阪「文学表現と思想の会」会員)

著者の野町氏は、長年にわたり
高知県の県立高校や教育委員会事
務局で同和教育に携わった経歴を
持つ。傍ら氏は永井荷風を愛読す
る。本書は、そのような著者が、
折々に書きとめた文章からなつて
いる。

本書の論考の多くは、藤田敬一
氏が刊行会代表を務めている『こ
ぺる』誌が初出である。著者は、
「『同和はこわい考』(阿吽社)お
よびその後の氏の言論活動から受
けた影響がなければわたしの『こ
ぺる』所載の原稿もなかったといっ
て過言ではありません」とあとが
きに書いている。

一九八七年に刊行された藤田敬
一氏の『同和はこわい考』は、部
落解放運動に一石を投じた。部落
外の人間で解放運動の随行者であつ
た藤田氏が悩みぬいたことは、
「部落民でない者になにがわかる
か」という一言により、対話の道
が閉ざされてしまうということだ

あった。藤田氏が「随伴者にすぎ
ぬ自分に疲ればて」「挫折と不信」
に落ち込みそうになった時、氏も
編集に携わった『紅風』(四九号、
一九八一年九月)に掲載された「運
動が置き忘れてきたもの」という
前川む一氏の文章に出会う。

「私たち被差別部落の兄弟が、肩
をいからせて、世間を歩くように
なったのは、一体いつからのこと
で、何がそうさせるようにしたの
だろうか(中略)。「特措法」の前
と後とは、随分、兄弟の心と人
間とはかわった。かわらずにある
のは、依然としてつづく部落差別
と、深く屈折した憎悪である」
「貧しさはもう御免だ。差別もも
う許せない。しかし、物を要求す
るときだけ『部落差別をいう』心
のいやしさと怠惰はもっと許せな
い」と、前川氏は書いた。藤田氏
は前川氏との対話を通して、「対
話のとぎれるしくみ」に風穴をあ
け、「両側から超える」ために、

なにができるかを考え始める。この問いかけの中で生まれたのが『同和はこわい考』であった。

著者が初めて差別事件を体験したのは、高校教員になって五年目のことである。生徒の机に「エタ」という落書きが見つかり問題になった。物騒然たる中、延々と職員会議が続く、「差別者としての教職員は同和地区出身生徒、保護者部落解放運動団体に拝跪せよ」というに至る。たしかに学校で落書きは発見された。しかし、そのことで個々の教員が差別者ということになるのか。何はともあれまずは跪いて難をさげようという職員会の姿勢は著者には納得しかねるものだった。

その後も著者は、さまざまな部落差別に係わる場面に遭遇するが、対話を拒む一方的な糾弾と糾弾される側の萎縮に疑問を感じていた。そのような時に、藤田敬一氏の『同和はこわい考』に出会うのである。

著者は『同和はこわい考』の対話のとぎれるしくみに風穴をあけるといふ提案を、さらに押し進め、精神の自由に則った開かれた対等の立場での議論の必要を説く。同

和問題が一步新しいステージに入ったことを感じさせる論考である。

全体は三部に分かれている。

第1部「永井荷風と部落問題」では、出版における差別的用語の扱いについて論じ、永井荷風の被差別部落についての記述を通して、被差別民へのまなざしを探っていく。

まず論じられるのは、永井荷風の「傳通院」という随筆の改竄問題である。この随筆は、幼少期の荷風の生活圏であった小石川界隈の失われた風物を懐かしんで書かれたものである。その一角には被差別部落もあった。文中に次のような個所がある。

「嘗ては六尺町の横町から流派の紋所をつけた柿色の包みを抱へて出て来た稽古通ひの娘の姿を今は何處に求めやうか。久堅町の穢多町から編笠を冠つて出て来る鳥追の三味線を何處に聞かうか。時代は變つたのだ」

これは一九八一年、岩波書店刊『荷風随筆』第一巻に所収の「傳通院」からの引用である。

ところが一九八六年刊の野口富士男編集による岩波文庫版『荷風随筆集』では、旧字旧仮名の表記が改められ「傳通院」が「伝通院」となっただけでなく、「久堅町の穢多町から」の部分が「久堅町から」とされ「穢多町」の語が削除されてしまっているのである。これは伏字にするよりも一層不誠実な対応だと著者は言う。荷風は

「小石川、久堅町の一角がかつては『穢多町』であり、『鳥追の三味線』は被差別民の生業であったと記述している」のであり、その事実が読者の目に隠されてしまうと言っているのである。

岩波書店は二〇〇〇年四月に現代文庫の一冊として川本三郎編『荷風語録』を刊行する。編集付記に「本書に収録した作品の中に、今日の観点からは不適當と思われる表現があるが、原文の時代性を考慮し、そのままとした」とあるにもかかわらず、収録の「伝通院」の底本としているのは改竄のある『荷風随筆集』であり、ここでも「穢多町」の語は削除されたままである。岩波書店に一考を求める文書を送ったが、梨のつぶてとのことである。

著者は差別語を巡る岩波書店の姿勢を検証する。

●高橋貞樹『特殊部落一千年史』を岩波文庫に収録する際、『被差別部落一千年史』に改題。

●永井荷風『断腸亭日乗』の昭和二年一月二三日の北原泰作天皇直訴事件について記した個所。一九九二年から配本が始まる『荷風全集』では「昨日号外を売る声聞こえし故何事なるやと思ひぬたりしに、過日名古屋にて觀兵式の折穢多村より徴兵に取られたる一兵卒今上皇帝の馬前に進み出で、直訴なせし事変なりといふ」となっている個所、一九六二年から配本の第一次『荷風全集』では「穢多村」の個所が「×××」とされていた。

●河上肇『自叙伝』中の、小菅刑務所に収監されていたおりのことを書いた個所で、河上はある獄舎を「特殊部落であり」としていたが、岩波書店は「特殊部落であり」を消して「七字削除」とした。

●『漱石全集』中の『坑夫』における伏字の措置は古い。さつまいもを「芋中の、とも云はるべき此のお薩」と形容した個所。「、、」

については「差別的言辞を憚り、昭和十年の決定版以来伏字とした」との注がある。この例では逆に最新版で「、、」の箇所は「穢多」という文字が起こされた。著者によれば、『漱石全集』にはもう一個所、伏字になっていた箇所があり、これも最新版では「穢多」の字が起こされた。

●杉田玄白の『蘭学事始』の原文の「腑分の事は穢多の帛松といへるもの、此事に巧者の由にて」の箇所が、緒方富雄の現代語訳（一九四四年）では「穢多」が隠され「ふわけの仕事は虎松というのが巧みだというので」とされている。この箇所の穢多の文字の扱いを巡る苦慮は、他社の現代語訳にも見られるところである。

著者の一貫した主張は、いかなる表現も、時代意識の反映であるから改変すべきではないというものであり、「漱石ほどの知識人においてなお被差別民には厳しいまなざしを注いでいた」という事実を隠すべきではないというものがある。右に掲げた、岩波の出版姿勢を見る限り、著者の主張通りの方向に進んでいるようにも見える。

原稿の削除、改変は荷風の手によつても行われた。そこに著者は、部落問題に遭遇した時の荷風の反応を見ようとする。

荷風自身による削除は「巷の声」という随筆に対してなされる。この作品中に子どもの頃に見た雪駄直しを回想した「道具を入れた箆を肩先から巾広の真田の紐で、小脇に提げ、デーイデーイと押し出すやうな太い声。それをば曇つた

日の暮方ちかい頃などに聞くと、何とも知らず気味のわるい心地がしたものである」という箇所がある。削除の経緯は『断腸亭日乗』に見ることができ、北原泰作天皇直訴事件についての日記の数日後の昭和二年一月三日の日記である。銀座を歩いてきた荷風は知人に会う。『中央公論』正月号のために書いた「巷の声」に雪駄直しのことを書いたと話すと、その知人は、菊池寛が作品中に穢多の文字を用いたために水平社に壺千円をゆすり取られた話をし、雪駄直しの記述は「水平社の禍を招ぐやも測りがたければ心したまふべし」と言う。荷風は「近藤君のはなし心にかゝりし故、早速手紙を認め、過日郵送せし拙稿中雪駄直

しにかゝる文字は印刷の際削除すべき旨島中氏の許に送りぬ」と記している。雪駄直しは被差別民の生業であった。削除箇所は「雪駄直し」と「デーイデーイ」というその呼び声についての記述であるが、これは一九六二年、岩波の『荷風全集』に収録された時には復元された。荷風の水平社に対する過剰な反応といえる。

「永井荷風は部落問題について深く考察し論じた文学者ではなかった」と著者は書いている。しかし、好んで陋巷を流浪した荷風の眼差しは、自然、被差別部落や貧民街に注がれる。荷風に、部落問題や貧困問題が社会問題に発展しうるものであるという認識はあつたはずである。しかし著者の言うように「荷風の場合、江戸の昔とその雰囲気が残る明治の世の『情趣』を作り出すために背後の『社会問題』は外に追いやっていた」のである。

「ひかげの花」という作品がある。私娼のお千代とそのヒモ重吉を描いた作品であるが、この作品の創作の舞台裏を荷風は『断腸亭日乗』に書いている。昭和七年（一九三二）の暮れに荷風はお千代のモデルと

なる黒沢きみという女性を知り、交情を重ねるようになる。荷風は「閨中秘戯絶妙」などと記している。永井荷風はこの女性をモデルにして小説を書きたいと思い、浅草の警察署を訪れ、黒沢きみの戸籍の閲覧を申し出るのである。閲覧は許されなかったが、翌日には探偵事務所に「黒沢きみ身元探索の事を依頼」するのである。現代の人権意識からは考えられないことである。荷風は「彼女は茨城県水戸市外の水平社に属するものなるやの疑もあるなり」と記している。荷風は、なにを以てそんなふうに考えたのであろうかと著者は問う。「ことは荷風の部落および部落民に対するイメージの問題に係わる」と言うのだ。著者は荷風作品のいくつかの断片にその手がかりを得ている。

ひとつは、大正一三年、プラトン社発行の『女性』に発表された「寺めぐり」（のちに「礪川逍遙記」と改題）という作品中の、虎蔵という永井家の抱車夫の父親が「町方の手先」だったとして、その思い出に触れた部分である。少年時代、荷風は虎蔵に連れられてその家を訪ねたことがあつた。「貧しき家

の夕闇に盲目の老父のかしらを剃りたるが、兀然として仏壇に向ひて鉦叩き経誦める後姿、初めて見し時はわけもなく物おそろしくおぼえぬ。わが家の女中ども虎蔵がおやぢはむかし多くの人を捕へ拷問なぞなしたる報ひにて、目も見えぬやうになりしなりと噂せし」と書かれていた。「町方の手先」

は江戸時代の被差別民である。

もうひとつは、先に挙げた「巷の声」の雪駄直しの呼び声について書かれた「曇った日の暮方ちかい頃などに聞くと、何とも知らず気味のわるい心地がしたものである」という箇所。

荷風が被差別民に対して感じていたのは「わけもなく」「何とも知れ」ない異様な雰囲気であった。これは「もちろん被差別民が異様なのではなく、異様と感じる心性が社会意識としてあって、荷風もそのなかにあった」ということである。

他方で『日和下駄』という作品には「貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世をしている年寄りをみると同情と悲哀とに加えてまた尊敬の念を禁じ得ない」という箇所がある。著者は「尊敬というのはい

ささか奇異であるが、下町の陋巷に美と情緒を発見した文学者のそこに住んで生活したいという憧れの気持ちを表した言葉であろう」と書いている。住んでみたいと思っただろうかとは分らないが、時代が下るに連れて失われていく、下町とそこに暮らす人間の哀愁を尊んだのであろう。

『断腸亭日乗』は戦後になって出版された。この出版に際しても、荷風自身の手によって、切り取り、復元などの措置が加えられている。荷風によって手を加えられた一つは、戦中の軍部を批判した箇所である。戦中は「軍部からの難を避けるべく細心の注意をはらって『切取』とか『抹消』とかの措置」をほどこしていた荷風であったが、昭和一六年六月一五日の日記に「今日以降余の思ふところは寸豪も憚り恐るる事なくこれを筆にして後世史家の資料に供すべし」と記し、続けて軍部批判を行なっている。

戦後、中央公論から出版する際に、荷風は原本では削除されている箇所を復元したが、逆に難を恐れずとして書き付けた軍部批判の部分新たに削除したりしている。

著者は、磯田光一著『永井荷風』から「祖国が敗亡に瀕し、国民が占領軍への礼讃者になってしまったとき、荷風は多くの言論人に和して、自国の過去を裁くことだけはためらった」「あえて戦後の動向に和合しない」「荷風ごのみの韜晦」であったとの解釈を引用している。

今一つ、荷風により削除、改変されたのは、いずれも「穢多」という記述に係る箇所である。著者の調べでは、それは三個所あることである。部落解放運動をふくむ時代の潮流が荷風に、「穢多」という語は避けるべきだという判断を迫ったのではないかと著者は推測している。

第1部にはその他に「出生の秘密を引きずる作家たち」と題する章があり、社会的差別意識の時代制約から、自分の出生や、妻の前身など隠さなければならなかった作家たちのことが語られ、それに対する荷風の見解も紹介される。

第2部「隠せば差別はなくなるのだろうか？」では、すでに第1部の記述と合わせ紹介したが再度文章の改竄問題が語られ、著者が教育現場で遭遇した「遠慮の構造」

(小浜逸郎氏の用いた語)からくる萎縮した精神に関連付けられる。著者の主張は、すでに冒頭で述べた通りであり、その事例の一つ「机に書かれた落書き」事件についてはすでに紹介した。

第3部「荷風のはとりで」は、文字通り荷風を巡るエッセイで、主に映画化された荷風作品について語られている。著者の荷風への愛好ぶりが窺える。

その他に「荷風の東京をあるく」と題する五編の短文が挿入されている。著者は、荷風が江戸切絵図を懐に江戸の面影を求めて東京の町を歩いたように、カメラを下げて荷風が作品に描いた東京の面影を求めて歩く。

以上のように、著者が折々に書きとめた文章からなるので、やや雑多な感じを与えるが、それらを通して「開かれた議論を」という著者の一貫した姿勢を見ることが出来る。永井荷風をこれまでにな

い視点から論じたユニークな作品である。(リベルタ出版刊、二〇一二年三月、一九〇〇円)

人権キーワード2012

部落解放 663号 (解放出版社刊, 2012. 6) : 630円

特集 新たな外国人管理法制を問う

本の紹介 『中学生の質問箱 在日朝鮮人ってどんなひと?』

(徐京植著) 北川知子

インタビュー 育て、屠畜し、さばいて、売る 大阪府・貝塚市立と畜場、最後の屠畜 北出新司、北出昭 インタビューア 鎌田慧

ひょんな出会いからの国際交流 大阪イスラム文化センター、コリア国際学園が部落の中に 福田憲和

否定された障害者制度改革 「障害者総合支援法案」の問題点 竹端寛

かくれスポットおおさか案内 5 舟場・北野 吉村智博
学校における性暴力—支援者としてのありかたを問う 3
性暴力について聞こうとする すぎむらなおみ

部落解放 664号 (解放出版社刊, 2012. 7) : 630円

特集 部落問題と向きあう若者たち 5

劇評 中西和久ひとり芝居『しのだづま考』 新古典芸能となりつつ 日野範之

ケリム紀行 韓国・慶州で全国水平社の「国際連帯」を思う 守安敏司

かくれスポットおおさか案内 6 天神橋筋 吉村智博

まちかどの芸能史 17 鉢叩きと空也堂 村上紀夫

部落解放研究くまもと 63号 (熊本県部落解放研究会刊, 2012. 3)

特集 第30回九州地区部落解放史研究会報告

熊本県の被差別部落の成り立ちとその周辺 山本尚友/慶長期福岡藩の『かわた高』をめぐって 石瀧豊美

部落問題研究 199 (部落問題研究所刊, 2012. 3) : 1, 111円

「研究の足跡」その3 鈴木良氏に聞く 1

史料紹介 加賀国浅野村領皮多文書 上 高澤裕一
書評

廣川和花著『近代日本のハンセン病問題と地域社会』

松岡弘之/藤本清二郎著『近世身分社会の仲間構造』片岡智

紹介 清水修二著『原発になお地域の未来を託せるか』梅本哲世

Some Approaches to Human Rights Education 生田周二

部落問題研究 200 (部落問題研究所刊, 2012. 4) : 1, 111円

部落問題研究の新段階—『部落問題解決過程の研究 第1巻 歴史篇』鈴木良・二論文の検討— 広川禎秀

「研究の足跡」その3・続 鈴木良氏に聞く 2

鈴木良氏著作目録

史料紹介 加賀国浅野村領皮多文書 下 高澤裕一

実践報告 サークルタイムと学級満足度—国語科における子どものつながりをつくる取り組み— 櫻井恵子

紀要部落問題研究 (131~200輯) 総目次

ライツ 155 (鳥取市人権情報センター刊, 2012. 4)

今月のいちおし!! 溝渕佳美著『笑うオカン戦士—溝渕カミ闘病2000日—』 川上学

ライツ 156 (鳥取市人権情報センター刊, 2012. 5)

今月のいちおし!! 『夜と霧』(ヴィクトール・E・フランクル著) 福壽みどり

リベラシオン 145 (福岡県人権研究所刊, 2012. 3) : 1, 000円

博多柳町遊郭の人身売買の変遷 身代金と前借金 横田武子

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 11 偶然発見された『蘭学事始』原本—福岡藩の蘭学と解剖 4— 石瀧豊美

水平への詩想 水平社九州同人の短詩型文芸 下 金山登郎

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 6 —『全九州水平社史料集(仮)』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

資料紹介 生活の柄 63 —「近世民衆史の泉」改め— 竹森健二郎

リベラシオン 146 (福岡県人権研究所刊, 2012. 5) : 1, 050円

特集 輝ける闇—山本作兵衛の世界

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 12 腑分けはなぜ行われたのか—福岡藩の蘭学と解剖 5— 石瀧豊美

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 7—『全九州水平社史料集(仮)』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

資料紹介 生活の柄 64—「近世民衆史の泉」改め— 竹森健二郎

歴史学研究 889 (歴史学研究会編, 2012. 2)

大阪人権博物館のリニューアルをめぐって—学芸員の思索— 吉村智博

であい 600 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.3) : 150円

人権のまちをゆく 61 全国水平社創立90周年一人の世に熱と光を— 駒井忠之

人権文化を拓く 175 排除する社会・排除に抗する学校
西田芳正

であい 601 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.4) : 150円

人権のまちをゆく 62 アイヌ民族学習 ホンモノから学ぶ

人権文化を拓く 175 思い出すこと、あれこれ 中尾健次

であい 602 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.5) : 150円

人権のまちをゆく 63 長島愛生園の海は青い

人権文化を拓く 176 中国地方都市の暮らしと教育事情—貴州だより— 八木良治

であい 603 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.6) : 150円

人権文化を拓く 177 「国連しきじの10年」最終年を盛り上げよう～岡山大会に「しきじ実践」を持ち寄ろう～ 森実

ねっとわーく京都 280 (ねっとわーく京都21刊, 2012.5) : 500円

戦後半世紀の京都市行政は私たちに何を伝え、何を残したのか—元京都市経済局長清水武彦さんに聞く 5

ねっとわーく京都 281 (ねっとわーく京都21刊, 2012.6) : 500円

戦後半世紀の京都市行政は私たちに何を伝え、何を残したのか—元京都市経済局長清水武彦さんに聞く 最終回
年報近現代史研究 4号 (近現代史研究会刊, 2012.3)

1920-30年代の失業救済事業の地域的展開と「登録労働者」—京都市失業救済事業を事例に— 杉本弘幸

ヒューマンJournal 201 (自由同和会中央本部刊, 2012.6) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 4 「支配の道具」論にしばられて 灘本昌久

ヒューマンライツ 289 (部落解放・人権研究所刊, 2012.4) : 525円

受け継がれる全国水平社の精神—全国水平社創立九〇周年シンポジウム (要旨)

ヒューマンライツ 291 (部落解放・人権研究所刊, 2012.6) : 525円

まだ出会っていない人たちと出会い、お互いに「違和感」を語ることから始めよう—大阪の状況はあなたも当事者のひとりです 湯浅誠さんに聞く

どうなる！大阪の教育—教育基本条例案を考える 池田知隆

大阪人権博物館への補助金存続を—大阪府知事・大阪市長の補助金打ち切り方針の表明に際して 寺木伸明

ひょうご部落解放 144 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2012.3) : 700円

特集 動いてる？兵庫の人権状況

進んでる？「人権侵害救済法」Q&A 橋本貴美男／「外国人教育指針」策定から10年 辻本久夫／DV被害者支援—民間支援団体の活動を通して— W・Sひょうご

被差別部落の女性インタビュー 1 息子に見せたい、伝えたい。「ママが困っているときに、助けてくれる人がこだけおるねんで」と 杉本蘭さん

兵庫の人権団体紹介 1 神戸定住外国人支援センター

映画の紹介 「虎ハ眠ラズ～在日朝鮮人ハンセン病回復者 金泰九～」 齊藤貞三郎

本の紹介

『草の根の軍国主義』(佐藤忠男著) 兵藤宏／『改定入管法 Q&A』佐藤信行

[ひょうご部落解放・人権研究所]研究紀要 17号 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2011.3) : 1,000円

領家穰元所長追悼号

領家穰『ひょうご部落解放』執筆一覧(論文、随筆 49編)／講演録「無題」領家穰／追悼文 日野謙一、角岡伸彦、山中速人、辻本久夫、ともいきみかず、大谷強わたしの町 人権の歴史—前編 人権の歴史の歩み 西川専一

部落解放 660号 (解放出版社刊, 2012.4) : 630円

特集 隣保館活動のいま

本の紹介 上杉聰著『部落を襲った一揆 新装版』原田泰蔵

かくれスポットおおさか案内 3 釜ヶ崎 吉村智博

まちかどの芸能史 15 日暮太夫と近松寺 村上紀夫

学校における性暴力—支援者としてのありかたを問う

性暴力に再会する すぎむらなのみ

部落解放 661号 (解放出版社刊, 2012.5) : 630円

特集 「しきじ」のいまとこれから

アンケート調査にみる部落女性の現状と課題 埼玉・愛知・奈良・京都・大阪・兵庫での調査結果から 山崎鈴子

かくれスポットおおさか案内 4 日本橋筋 吉村智博

まちかどの芸能史 16 鉢叩き 村上紀夫

部落解放 662号 (解放出版社刊, 2012.5) : 1,050円

信州農村開発史研究所報 117・118号 (信州農村開発史研究所刊, 2011. 12)

研修を終えて 中本たみ子

長寿のご賞美 佐藤敬子

塩名田宿「にぎり飯拒否事件」の新史料 斎藤洋一

盗人に縄をかける 斎藤洋一

信州農村開発史研究所報 119号 (信州農村開発史研究所刊, 2012. 3)

江戸時代の子守と子守歌 佐藤敬子

高校歴史教科書の部落史記述 斎藤洋一

人文学報 100号 (京都大学人文科学研究所刊, 2011. 3)

博物館における表象行為と社会的差別—差異の表象をめぐって— 吉村智博

水平社博物館研究紀要 14号 (水平社博物館刊, 2012. 3) : 1,000円

奈良県における運動史研究の蓄積状況と課題—大和同志会創立100年、奈良県水平社創立90年によせて— 井岡康時

高知県水平社の政治運動への進出 吉田文茂

月刊スティグマ 189 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 4) : 500円

特集 第3回東日本同和教育実践交流会開催

連載 アニメ「もののけ姫」と日本の差別問題 鎌田行平

月刊スティグマ 190 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 5) : 500円

連載 アニメ「もののけ姫」と日本の差別問題 鎌田行平

月刊スティグマ 191 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 6) : 500円

特集 部落解放同盟千葉県連合会第36回定期大会開催

連載 アニメ「もののけ姫」と日本の差別問題 11 「差別」の原因とは何か 鎌田行平

〔世界人権問題研究センター〕研究紀要 17号 (世界人権問題研究センター刊, 2012. 3) : 2,500円

権利アプローチとしてのケイパビリティ・アプローチの意義と可能性—女性のエンパワメントの観点から— 三輪敦子

1930年代後半における大阪市内の被差別部落の生活実態についての覚え書き—大阪市社会部編『本市に於ける不良住宅地区図集』『本市に於ける不良住宅地区調査』および『本市における密住地区調査』から— 廣岡浄進
同朋衆の系譜—足利義満期の遁世者をめぐって— 家塚智子

山城国相楽郡上狛村における夙の歴史的諸相 吉田栄治郎

初期中央融和事業協会の理論と実践—創立 (1925年9月)

から再編 (1927年7月) まで— 本郷浩二

外国人登録令と在日朝鮮人団体—登録実施過程を中心に— 鄭榮桓

日本の人身取引対策の課題—特に防止の観点から— 吉田容子

カナダにおける外国人女性に対するドメスティック・バイオレンス—被害者の法的保護と支援体制について— 福嶋由里子

1970年代の『季刊教育法』における子どもの人権論—差別・マイノリティの諸課題に関する研究動向をめぐって— 住友剛

イギリス市民性教育の導入の経緯とその理論的土壌の検討 野崎志帆

オーストラリア先住民における教育実践—南東部アボリジナルの先住民特別教育プログラムを事例に— 友永雄吾

人権教育としての「障害児教育」をめぐる考察—オーソライズという切り口から— 松波めぐみ

もう一つの壬辰倭乱 (文禄役) の実相—日本国内の人々の目から— 『多聞院日記』などを中心に 仲尾宏

地域と人権 1111号 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 4. 15) : 150円

国民的融和論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 19 丹波正史

地域と人権 1112号 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 5) : 150円

全国水平社創立90周年に寄せて 2 社会問題としての部落問題の基本的な解決を図る 丹波正史

地域と人権 1113号 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 6. 15) : 150円

国民的融和論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 20 丹波正史

月刊地域と人権 338 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 5) : 350円

「同和減免」脱税で福岡国税局、判決文拒否 植山光朗

月刊地域と人権 339 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 6) : 350円

特集 第7回地域人権問題全国研究集会第4分科会 テーマ「『根深い差別』論と人権啓発のゆがみ」

「同和の特別扱い」「人権啓発」を超えた地域民主主義へ 石倉康次／「根深い差別意識」論と立花町差別はがき事件を検証する 植山光朗／大阪府民の目は確か「人権問題に対する府民意識調査 (抜粋)」から 藤本博／「差別意識は根深いか」について考える 長嶋茂／人権教育推進委員が廃止に 久松倫生

こるむ 10号 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2012. 4)

朝鮮学校の歴史 9 大学入学 (受験) 資格問題 3 金東鶴

佐賀部落解放研究所紀要 29 (佐賀部落解放研究所刊, 2012. 3)

特集 第17回全国部落史研究大会

記念講演 「中世の被差別民衆群像—九州から考える—」
服部英雄

分科会1・前近代史報告 「境界の神と仙台藩の「癪人小屋」」 鯨井千佐登／「対馬の被差別民」 中村久子

分科会2・近現代史報告 部落委員会活動と都市部落の「生活」—京都市田中部落を中心に— 廣岡浄進／福岡における部落委員会活動—「原点」としての西田事件— 富安信一

狭山差別裁判 430号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 1) : 300円

野間宏と寺尾判決 8 庭山英雄

狭山差別裁判 431号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 2) : 300円

野間宏と寺尾判決 9 庭山英雄

史観 166 (早稲田大学史学会刊, 2012. 3)

戦間期の筑豊における朝鮮人鉱夫の労働と生活—飯塚炭鉱を事例として— 佐川享平

試行社通信 308号 (八木晃介刊, 2012. 6)

作家・野間宏さん 自己内外対話 42

資料館紀要 40号 (京都府立総合資料館刊, 2012. 3)

京都町奉行所関係資料集 4 古久保家文書 「起源」歴史資料課

人権教育研究 20号 (花園大学人権教育研究センター刊, 2012. 3)

大津波の起源—沖縄の神話からみる自然の解釈 丸山顕徳

刑事裁判における事実認定はなぜ往々にして誤るのか—認識における特性と具体的事例 (野田事件) の検討 小林敏昭

ある性的被害者の供述分析 1 脇中洋

「家族」をめぐる<幻想>と<現実>—人権教育における課題と可能性をめぐる— 堀江有里

出生前診断と優生学 八木晃介

大学が担う障害を有する学生の文字情報へのアクセシビリティの確保について—2010年の改正著作権法施行以降の「テキストデータ」の扱いを中心に 植村要

デュアル・システムとしての労働組合—職場の労働組合の活動から— 安田三江子

職業としての宗教 島崎義孝

在宅型ホスピスの可能性と宗教の関わり方—「きぼうのいえ」聞き取り調査を踏まえて— 中尾良信

人権と部落問題 828 (部落問題研究所刊, 2012. 4) : 630円

特集 「3.11」からの復興

本棚 秦重雄著『挑発ある文学史—誤読され続ける部落/ハンセン病文芸』 東谷篤

文芸の散歩道 日清戦争の生んだ悲劇—川上眉山著「大村少尉」を読む 水川陸夫

人権と部落問題 829 (部落問題研究所刊, 2012. 5) : 630円

特集 憲法と国民生活

書評 『部落問題解決過程の研究』第2巻 教育・思想文化篇

同和教育の営みから学び尽くそう! 仲田陽一／「戦後日本の思想状況と部落問題解決の道程」を読んで 岩井忠熊

文芸の散歩道 田宮虎彦著・小説「土佐物語」と「異端の子」—極限状況での「零落」と「悲惨」を描いた作品 桑原律

人権と部落問題 830 (部落問題研究所刊, 2012. 6) : 630円

特集 人権教育を考える

大阪市の人権教育について 柏木功／今も「同和教育」が必要か—京都市の実態に見る— 新谷一男／福岡県の「同和」教育行政の現状と課題—「同和」の根に接ぎ木した「人権」教育— 植山光朗／島根県教職員組合発行の『人権・同和教育Q&A』(2012年版)について 長田明夫

文芸の散歩道 やっと発見できた—松永伊佐雄作「祭の夜」 秦重雄

人権と部落問題 831 (部落問題研究所刊, 2012. 7) : 630円

特集 女性の人権—働く女性の現状

文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民—都の錦の意気地— 小原亨

人権なら 16号 (NPOなら人権情報センター刊, 2012. 4) 全水創立90周年に想う

季刊人権問題 367 (兵庫人権問題研究所刊, 2012. 4) : 700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 全国同和教育研究協議会の八鹿高校の先生を批判した見解は許せない—当時の全同教の実態を明らかにする— 上 大同啓五

振興会通信 103号 (同和教育振興会刊, 2012. 3)

同朋運動史の窓 11 左右田昌幸

人権教育の現状と課題—関西学院大学における人権教育をめぐって— 舟木謙

追悼

領家さんの思い出 藤井和夫／兵庫県外教設立に尽力いただいた領家さんへ 辻本久夫

高等教育機関における人権教育をめぐって—関西学院大学の人権教育の現状より— 舟木謙

外国人の子どもに関する日本の教育施策の動向 辻本久夫

災害をめぐる諸問題 日野謙一

京都市政史編さん通信 42 (京都市市政史編さん委員会刊, 2012. 4)

『京都市政史 第2巻 市政の展開』発刊に際して 秋月謙吾

世界文化自由都市の源流にふれる—『京都市政史 第1巻』を読んで— 平井潔子

職員必読の一冊『京都市政史』 山村薫

京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 4 (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2012. 6)

座談会 地域福祉の現場から 1 ～喫茶・会食事業を通じた「寄り場」の意義～

KG人権ブックレット 18 (関西学院大学人権教育研究室刊, 2012. 3)

人権問題講演会

薬害エイズとの闘い 家西悟／“比較しない”三原則～無理せず・卑下せず・押し付けず・カミングアウトから見えてきた私の幸福論 笹野みちる／人災としての東北大地震～地球の上で人間は何をしているのか?～ 桃井和馬／「民政移管」後のビルマ (ミャンマー) 開発事業がもたらす環境・人権への悪影響 秋元由紀

グローブ 69 (世界人権問題研究センター刊, 2012. 4)

同和行政・隣保事業再考の必要性 山本崇記

「1970年代以降における在日朝鮮人教育の再考」 宋英子

「われわれ抜きで、われわれのことを何も決めるな」

松波めぐみ

[紹介] 秋定嘉和著『人権から見た近代京都』 杉本弘幸

人権の“館” 厳浄寺—滋賀水平社発祥の地 仲尾宏

研究所通信 386 (部落解放・人権研究所刊, 2012. 5) : 100円

主張：大阪人権博物館への大阪府・大阪市の補助金存続を 寺木伸明

国際人権ひろば 102 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2012. 3) : 350円

特集 人間らしい仕事—ディーセント・ワークを考える

国際人権ひろば 103 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2012. 5) : 350円

特集 東日本大震災を記録して伝える

こべる 229 (こべる刊行会刊, 2012. 4) : 300円

ひろば 147 同和地区を知ろうとすることはすべて差別ですか—東近江市の事案をとおして考える 石垣敏昭

尼崎だより 40 次への旅たちをみんなして見送るまでがターミナルケア 中村大蔵

いのちを生きる 50 学校の風景—ある異動希望 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 230 (こべる刊行会刊, 2012. 5) : 300円

『こべる』終刊に寄せて 1 誌名「こべる」誕生秘話 山本尚友

『こべる』終刊に寄せて 2 自由にものが言える孤高の小冊子 小澤覚

尼崎だより 41 定点支援・継続支援・永続友好を目指す 中村大蔵

四日市から 24 介護の常識をくずす—「かいご学会」に参加して 坂倉加代子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 231 (こべる刊行会刊, 2012. 6) : 300円

自分史のこころみ 11 周縁世界に生きる人びとに寄り添う マグダレナ三千代

『こべる』終刊に寄せて 3 私も「ひと区切り」つけることにしよう 阪本清

『こべる』終刊に寄せて 4 出発点としての『こべる』

恩智理

いのちを生きる 51 「寛解です」と告げられる 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 232 (こべる刊行会刊, 2012. 7) : 300円

ひろば 148 「高度の平凡さ」について 野町均

『こべる』終刊に寄せて 5 「生き合っている」ことを確認し合う冊子 沼尾実

こころのつづやき 3 私の住む町で起こったこと 井貝順子

いのちを生きる 52 ホスピスでホームパーティーを開く 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

『社会時評集 花森安治「きのうきょう」』(花森安治著) / 『切羽へ』(井上荒野著) / 『日本の霊性』(鈴木大拙著)

今週の1冊 『犠牲のシステム 福島・沖縄』(高橋哲哉著)

解放新聞 2571号(解放新聞社刊, 2012. 6. 4) : 120円
松岡書記長インタビュー

大阪人権博物館への補助金打ち切り方針に抗議する 5月9日付抗議文

解放新聞 2572号(解放新聞社刊, 2012. 6. 11) : 80円
大阪人権博物館への補助金打ち切りと人権行政の後退に断固、抗議する大阪府連の声明

今週の1冊 『朝鮮人強制連行』(外村大著)

解放新聞 2573号(解放新聞社刊, 2012. 6. 18) : 80円
解放の文学 74 「わが解体」へとすすむ思想 高橋和巳と『悲の器』 音谷健郎

今週の1冊 『幕末・明治期キリスト者群像』(木越邦子著)

解放新聞大阪版 1920号(解放新聞社大阪支局刊, 2012. 6. 15) : 100円

大阪人権博物館の補助金廃止への抗議声明(骨子)

解放新聞京都版 916号(解放新聞社京都支局刊, 2012. 4. 1) : 280円

2012年度一般運動方針(第1次案)

解放新聞京都版 917号(解放新聞社京都支局刊, 2012. 4. 10) : 70円

講演要旨 水平社会へ～わたしたちの到達点と展望 1 谷元昭信

解放新聞京都版 922号(解放新聞社京都支局刊, 2012. 6. 10) : 70円

新委員長に聞く 希望をもてる運動をつくりたい

解放新聞京都市版 247号(部落解放同盟京都市協議会刊, 2012. 5) : 150円

京都市いきいき市民活動センター探訪 左京西部いきいき市民活動センターを訪ねて

解放新聞京都市版 248号(部落解放同盟京都市協議会刊, 2012. 6) : 150円

京都市いきいき市民活動センター探訪 左京東部いきいき市民活動センターを訪ねて

解放新聞滋賀版 1976号(部落解放同盟滋賀県連合会刊, 2012. 5. 28)

部落解放同盟滋賀県連合会第65回定期大会運動方針(案)

解放新聞福岡県版 467号(解放新聞社福岡支局刊, 2012. 2. 29) : 50円

松本龍議員「新春の集い」報告

語る・かたる・トーク 206(横浜国際人権センター刊, 2012. 4) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 3 勉強に負けない子どもを 外川正明

語る・かたる・トーク 207(横浜国際人権センター刊, 2012. 5) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 4 混乱し悩んだ「学力」のとらえ方 外川正明

「週刊金曜日」の人権感覚 三谷誠

語る・かたる・トーク 208(横浜国際人権センター刊, 2012. 6. 20) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 5 子どもに焦点をあてた授業を 外川正明

性同一性障害者としての人生～女性だった25年間、そして男性としてのこれから～ 前田良

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 28(カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2012. 4)

「忌避意識」脱常識の部落問題(第4回対話集会) 朝治武, 灘本昌久

カトリック部落差別人権委員会ニュース 139(日本カトリック部落差別人権委員会刊, 2012. 5)

「講演録」部落の歴史を見直す～奈良県を中心に～ 1 吉田栄治郎

かわとはきもの 159(東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2012. 3)

靴の歴史散歩 104 稲川實

皮革関連統計資料

関西外国語大学人権教育思想研究 15号(関西外国語大学刊, 2012. 3)

門田秀夫先生を追悼する 谷本栄子, 大田垣義夫, 植田都, 加藤昌彦

ニュージーランドの難民認定における無国籍者 新垣修
国の福祉政策の度重なる変更で翻弄され続けた障害者と家族達一保護者、そして施設運営者としての立場から一
池永満生

バングラデシュの児童労働問題—Harikin法案の影響を中心に 内田智大

障害のある人への差別禁止条例について～千葉県条例を中心に～ 久禮義一・平峯潤

「放射能差別」をなくせ～福島原発事故に寄せて—リスクの分担を一 前田隆司

初等教育の中の人権 村上明子

関西学院大学人権研究 16(関西学院大学人権教育研究室刊, 2012. 3)

収集逐次刊行物目次 (2012年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

明日を拓く 93 解放研究 25 (東日本部落解放研究所刊, 2012. 1) : 2,100円

「武州鼻緒騒動」関係史料集成 後編 間々田和夫, 大熊哲雄, 畑中敏之, 廣畑研二

「武州鼻緒一揆」について一鼻緒一揆の全体像と今後の課題— 間々田和夫

日本社会主義同盟と水平社 廣畑研二

明日を拓く 94 (東日本部落解放研究所刊, 2012. 2) : 1,050円

特集 東日本部落解放研究所第25回研究者集会報告

明日を拓く 95 (東日本部落解放研究所刊, 2012. 3) : 1,050円

特集 南葛の教育と裁判

ウィングスきょうと 109 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2012. 4)

図書情報室新刊案内

『理系なお姉さんは苦手ですか?—理系な女性10人の理系人生カタログ—』 (内田麻理香著) / 『メディアとジェンダー』 (国広陽子・東京女子大学女性学研究所編)

ウィングスきょうと 110 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2012. 6)

図書情報室新刊案内

『就活女子の文章表現塾—アサーションスキルを磨く』 (浅野洋・宮淑子著) / 『ベーシックインカムとジェンダー—生きづらさからの解放に向けて』 (堅田香緒里 [ほか] 編著)

解放新聞 2562号 (解放新聞社刊, 2012. 3. 26) : 80円
解放の文学 71 震災に対峙するためには 辺見庸『眼の

海』 音谷健郎

解放新聞 2563号 (解放新聞社刊, 2012. 4. 2) : 120円

山口公博が読む今月の本

『「自己啓発病」社会』 (宮崎学著) / 『君たちはどう生きるか』 (吉野源三郎著) / 『深沢七郎外伝』 (新海均著)

今週の1冊 『事実婚 新しい愛の形』 (渡辺淳一著)

ぶらくを読む 69 大相撲の過去と現在 それは部落問題とどうかかわるのか 湧水野亮輔

解放新聞 2564号 (解放新聞社刊, 2012. 4. 9) : 80円
第69回全国大会特集号

解放新聞 2565号 (解放新聞社刊, 2012. 4. 16) : 80円

今週の1冊 『世界を変えた哲学者たち』 (堀川哲著)

解放新聞 2566号 (解放新聞社刊, 2012. 4. 23) : 80円
解放の文学 72 申京淑『母をお願い』 音谷健郎

解放新聞 2567号 (解放新聞社刊, 2012. 5. 7) : 120円
山口公博が読む今月の本

『腑分けの巧者—『蘭学事始』異聞—』 (大野滋著) / 『祝魂歌』 (谷川俊太郎編) / 『親鸞と道元』 (五木寛之, 立松和平著)

今週の1冊 『原発のウソ』 (小出裕章著)

[紹介] 松本人権推進古文書研究会 長野

解放新聞 2569号 (解放新聞社刊, 2012. 5. 21) : 80円
解放の文学 73 震災の絶望と希望 重松清『希望の地図』

音谷健郎

今週の1冊 まど・みちお著『いのちのうた』

解放新聞 2570号 (解放新聞社刊, 2012. 5. 28) : 80円
山口公博が読む今月の本

事務局よりお知らせ

◇今年度の部落史出張講座が無事に終わりました。今号に講演要旨を掲載していますが、詳しくは今年度末に発行予定の講演録をご参照下さい。また、当日配布しましたレジュメ・資料の残部がありますので、ご希望の方は下記までご連絡下さい。

◇後半期の部落史講座は11月・12月に予定しています。今年は水平社創立90年ということもあり、水平社をめぐって4人の方々に話をさせていただく予定になっています。詳しい日時・内容は決まり次第、ホームページやメールマガジン等でお知らせいたします。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分